

浪うてる間に、菜圃の點綴するを認む。三時頃厚和に着けり。

厚和は綏遠、余には歸化城の名こそ懐しけれ。幾たびか地圖の上にこの地を基點に、東西南北交通往來の跡を攷

究しけむ。舊土に入りたるやうに覺えて驛外に佇立し、彼方此方と眺めまはしつ。やがて案内せられて蒙古聯盟自治政府に、警務顧問大園長喜氏を訪ふ。大同の森一郎君の紹介に依るなり。自治政府は新城に在り。新城は驛正面の大道と丁字形に交る並木道の左端に位し、右端の舊城と相距ること約半邦里なり。此の地に治したる傳作儀が新たに工を加へたりとて、街路廣く近代的様相を有すれど、主として官衙とその關係者が住めるのみにて、舊城の殷賑に比すべくも非ず。大園氏の厚意により政府の案内を受け、こゝより南二十餘支里の青塚を弔ふ。鐵路の左、廣野原のたゞ中に突兀として聳えたる緑の丘は、汽車の旅客の眼を惹く異觀なりしが、これなん漢朝の悲曲に名を傳ふる王昭君の墳墓といふ青塚なりけり。政府より贈られたる案内の刷物、漢明妃（王昭君）小史には、匈奴の單于の死後明妃がその子に嫁するを強いらるゝや、妃はその不倫を悲しみ、漢に訴へて故土に歸らむと請ひしも許されず、『遂ニ黄河ニ投ジテ自盡ス。節烈ノ氣天地モ



二圖 青 塚

感動シ爲ニ黄河ノ水逆流シ、其屍ヲ黑河ニ送流ス。土人之ヲ撈取スルニ面目生ケルガ如シ、依テ之ヲ敬ヒテ神ト爲シ、大黑河河畔ニ塚ヲ築ク。恰モ山ニ似テ高サ二十餘丈、廣サ五十餘畝、石階アリテ登ル事ヲ得。由來此地附近白